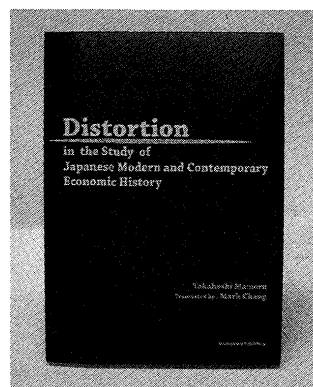


高橋衛著 マーク・チャン訳

Distortion in the Study of Japanese Modern and Contemporary Economic History

森本真一

マーク・チャン氏は現在でも昭和女子大学国際文化研究所に所属しておられるが、御訳書 *Distortion in the Study of Japanese Modern and Contemporary Economic History* を刊行してまもないころから英語コミュニケーション学科でのお仕事も兼任し始められ、私と同じ研究室にデスクを持たれた。私はそれまで特に親しく言葉を交わす機会がなかったチャン氏へのお近付きの印に訳書を差し上げてそれが私の六冊目の翻訳だと申し上げたところ、氏は私が何度か翻訳を手掛けていたことは知っていると言われた。チャン氏と私は研究の分野が異なるので氏が私の訳書の内容を詳しく御存じのことはないけれど、氏はどなたから私のことをお聞きになるなりしてある程度どんな人間なのか心得ておられたようだ。チャン氏は広島大学大学院で経済学を専攻して修士号を取得された。その折御訳書の原著者高橋衛氏の指導を受けられたそうだ。 *Distortion in the Study of*



2006年3月31日
春風社
A5判 220頁
定価 3333円 (本体)

Japanese Modern and Contemporary Economic History は、もしこれを私が再び日本語に訳し直せと言われたら、例えば『日本近現代経済史研究に見る歪曲』とでもするだろう。しかし原題は『明治から昭和へ 選択の屈折』である。この書名は著者高橋氏の文筆家としてのセンスの鋭敏さを仄めかして鮮明な印象を与えるが、実際に本を手にとって見ない人にはどの方面の著述なのかがあまりわかりやすすくないだろう。機械的に *From Meiji to Showa: Warped Selections* などとしたのは、恩師の労作に敬意を払いその趣旨を世の人に知ってもらうためのチャン氏の気配りの現れと察せられる。村上春樹が「翻訳というのはやたら時間のかかる『鈍くさい』作業だが、それだけに細かいところがしっかり身につくという大きな利点がある。(中略)翻訳が根っから好きだという人にそんなにひどい人はいないのではないか」(朝日新聞社『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』

六四ページ)と書いている。チャン氏は村上の言うような細やかさを備えた人の実例と見てよいだろう。チャン氏に社会科学系の本の紹介を頼まれたとき私はとても驚いた。がこの本で扱われていることと私が勉強してきたことはそれほどかけ離れている訳ではないとも思える。私はアメリカ文学のほかに比較文学にも興味を抱き、近代日本の文学あるいは日本の近代化と西欧とのかわりに焦点を合わせて国際会議で九回の発表を経験している。チャン氏はこのあたりのいきさつも幾分御承知のうえで御依頼くださったのではないかという気がする。『明治から昭和へ 選択の屈折』は五つの部分から成る。各部の表題は「明治維新と日本の近代化論争」、「日露戦後の転換路線」、「第一次世界大戦と産業合理化」、「右傾化・擬似革命と戦争」そして「戦中・戦後の『日本資本主義論争』」である。高橋氏は「はじめに」にこう記しておられる。「本書が意図するところは、この日本の近代がその重要な局面にのぞんで採択してきた選択についての、私なりの批判的検証にある。近代以降の歴史事象は、いうまでもなく政治・経済・社会あるいは文化・教育などとのからみあいのみならず展開してきたのであり、ここでも、それらを切り放して論ずることは、困難というものであろう」。高橋氏の意気込みと深遠な目論見が伝

わって来る文面ではないか。氏は「記述の中心は、いきおい経済史や経営史におかれたが、このような含意のもとでは、政治やあるいは反政治すらもが大きく関与しており、そのような屈折にも検討を加えんとしたものにほかならない。ここで選択という場合、近代史上にあって、歴史そのものが、いかなる選択を採択してきたかが、問われているのであるが、なかでもその方向を左右してきた政策の評価のいかんが課題であろう。課題は、しかし、そこにとどまらない。政策を決定づけてきた、時々思想ないしは思想状況の検証が問われなければならない」とも認めておられる。高橋氏は「維新後の日本は、インフュリオリティ・コンプレックスを内在させながら、欧米へのキャッチングアップを追求し」と指摘し、福沢諭吉の脱亜論に着目して日露戦争以後の日本が「遅れてきたがゆえの、いわば洗練されない粗暴な帝国主義に傾斜する様相となり、やがてはアジアにおける、いわゆる孤児と化するような歴史を歩み始める。(中略)この時期の歴史的選択には、大きな齟齬があったとみななければならない」と論じられる。私は大まかな捉え方をすれば明治以後のわが国の近代化の足跡は脱亜と混迷の二語で概括できると考えているので、高橋氏の所説を目にしたときには我が意を得た。

夏目漱石の『三四郎』の登場人物の一人は日露戦争での勝利にもかかわらず日本が滅びるだろうと予言する。漱石の「夢十夜」には行く先が不明な船に乗った人のことが書いてある。船が西へ向っているのかと尋ねると船員が「西へ行く日の、果は東か。(中略)東出る日の、御里は西か」(筑摩書房『夏目漱石全集10』五五ページ)と囁す。大変不安になったその人物は海に身を投げる。ロマン主義的な理想を追求しながら二十代中盤で命を絶った北村透谷は「漫罵」と題する著作のなかで「今の時代は物質的の革命によりて、その精神を奪はれつつあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より来りしにあらず。外部の刺激に動かされて来りしものなり。革命にあらず、移動なり」(筑摩書房『近代の文章』一六ページ)と歎じた。森鷗外は『青年』の主人公に「いったい日本人は生きるということを知っているだろうか。小学校の門をくぐってからというもの、一しゅう懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものから離れて職業にあり付くと、その職業をなし遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである」(岩波書店『青年』六六ページ)と日記に書かせた。漱石と鷗外が日本の社会に疑問を抱いてい

たのは確かなようだ。また透谷の姿からは表層的な近代化や西欧化途上の祖国への苛立ちが窺える。『青年』よりほぼ半世紀後にアメリカのジョン・アップダイクが著した『走れうさぎ』は、妻と情婦との間で揺れ動き当てもなく戸外を迷走する男の話である。また禅への関心が強いJ・D・サリンジャーは『ライ麦畑の受け止め手』で、論理的思考の筋道からの逸脱を望んでいるかのような若者の放浪を描いて反響を呼んだ。これらの作品を読んでみると、私は時代と洋の東西を問わず人間の心情面での営みとは徒労感を伴う果てしない螺旋的彷徨もしくは円運動にはかならないのかと感じる。

さて高橋衛氏は「明治から昭和へ 選択の屈折」の「終わりに」で過剰なほど御自身の記述や分析方法の不十分性を反省しておられる。これは一つには氏が往々にして進歩の計測が困難で、また研究成果も明瞭には見出し難い精神性にまつわる領域に踏み込まれたためではなからうか。今後高橋氏が経済を主たる基盤としながら文化全般に対する洞察を更に拡充されることを私は期待する。そしてチャン氏の語学力と機知によって高橋氏の好著が英訳され多くの人たちに読まれるようになったの喜びたい。

(もりもと しんいち 英語コミュニケーション学科)